

2021 サイエンスアゴラ「どうぶつたちの眠れない夜にスペシャル 実験動物編」に 出展して分かった、動物実験への社会の理解不足と、業界の情報発信の必要性

渡辺 千絵・橘 百合子（どうぶつたちの眠れない夜に）

はじめに

動物実験は、私たちの暮らしの中で誰もが恩恵を受けている分野のひとつである。しかし、1980年代の動物実験反対運動を機に、従事者からの正しい情報発信がされにくい風潮となった。現在でも、一般市民が知る機会が少ないため、誤解が生まれている現状にある。また、動物に時に苦痛を与えなくてはならない業務から、心の負担になっていることも注目されつつある。私たちはそれらに着眼し、サイエンスアゴラ2021で実験動物経験者と未経験者、双方の対話の場を作る試みを行った。

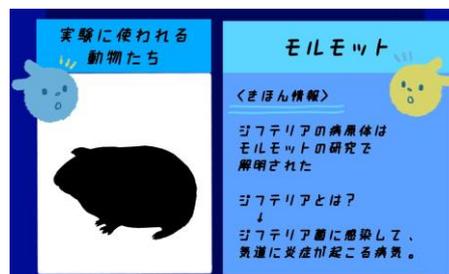


写真1 広報で使用したイラスト

方法

事前アンケート・広報・イベント当日・参加者アンケートの4点を実施した。

事前アンケートは、2021年9月5日～9月26日の22日間行った。対象者を動物実験経験者と未経験者に分け、それぞれ異なる設問を設定した。主に経験者は動物実験をした時の気持ちなど、未経験者は動物実験へのイメージなどについて調査した。

広報は、Twitterを使用した。動物実験や動物についての豆知識をイラスト付きで紹介した。また、10日前からはカウントダウンを行うなどして、一般市民からの興味関心と世界観を醸成した。

イベント当日は11月5日に実施した。前半は、実験動物管理獣医師と共に作製したオリジナル動画を放映して知識の共有を行った。後半はライブ配信を行い、事前アンケートを基に設定したテーマをサイコロの出目で決定し、ゲストとトークする形式で進行させた。視聴者は、YoutubeライブまたはZOOMのチャット欄に質問や感想を書き込んで参加した。

参加者アンケートは、11月5日～11月25日の21日間行った。対象者は分けず、面白かった点やもっと聞きたかった点、イベントの前後で動物実験のイメージの変化について質問を設定した。

結果と考察

事前アンケートの回答数は、動物実験経験者は79件、未経験者は76件であった。

動物実験経験者の回答では、動物実験を行ったことに対して葛藤を抱えている人が多く見られた。その経験を前向きに捉えている人もいれば、つらい経験として動物実験から離れる選択をした人もいた。具体的な回答としては、「とても辛かった。ただ、普段見ることのない体内を理解するきっかけになり、命を頂いてとても貴重な経験をさせてもらったと思っている。」「初めての時は、ショックで晩御飯は喉を通らなかった。仕事としている今は、動物たちに日々感謝している。」「一生やりたくないと思い、大学院で実験していたため大学院を退学しました」といったものである。また、動物実験経験者のアンケート内で頻出する単語から、どのように気持ちを持っているかを調べた。結果は、「動物(20件)」「命(16件)」「感謝(14件)」「無駄(12件)」「苦痛(8件)」が上位5つであった。ネガティブな単語も見られるが、「動物」という単語のあとに「感謝」という単語が多く、「命に感謝する」「命を無駄にしない」「苦痛を最小限にする」といった文章が見られた。動物実験未経験の方の回答では、動物実験をしている人に対する尊敬の気持ちを持つ人がいる一方で、「どのような目的なら、動物実験は行われてもよいと思いますか。」という質問に対し、「どのような目的でも動物実

験はしないほうがよい。」と回答した人の割合は18.42%であった。さらに、「動物実験に関して、どのようなイメージがありますか。」という質問では、「よく知らない」「分からない」といった意見も見られ、否定的な意見を含め動物実験の現状が伝わっていないことを表す結果となった。

当日のピーク時の視聴人数は約70人であった。参加者の方々には、配信を見ながらチャットを送る形で参加していただいた。頂いたコメントは、「10年以上前ですが、入社時に動物愛護団体等から攻撃を受ける可能性がある為、仕事内容はあまり口外してはいけないと言われました。ですので、現在、SNSで発信されてるのがとても新鮮です。」「どのような形でどのような内容を情報公開していくのが良いのでしょうか。また一般の方はどのような情報公開を求めていると思われませんか。」「実験動物のリホーミングってどのようにして可能になるのですか？遺伝子改変をした動物などは実験室や飼育室から決して出してはいけないというようなイメージがあります。」などであった。特に、リホーミング（実験の終わった動物を一般家庭で引き取ること）についての話題はコメントが多く寄せられ、高い関心が伺えた。

イベント後の参加者アンケートの回答数は24件であった。参加前後で動物実験へのイメージがどのように変わったかという質問では、動物実験未経験者からは「動物実験が身近なものだと改めて感じた。残酷なイメージが変わった。」「第三者機関が存在することに衝撃を受けました。きちんと評価の基準ができてきているのですね。」、動物実験経験者からは「もっと発信が必要と感じました。自分自身が、動物実験関係者なので。」といった回答があった。また、動物実験従事者からは「動物実験をしていない方からの声を聞くことができて良かった。」といった回答があり、一般市民の意見を知る機会となったことが分かった。

これらの結果から、対話の場を設けたことで動物実験従事者と一般市民のお互いが持っている意見を知る機会となったことが分かった。

また、今回は動物実験を推進するか・反対するかという二極の立場をとるものではなく、フラットに話し合うということを一貫した。そして、ゲストの実験動物管理獣医師、大沼健太氏も情報発信を積極的に行いたいという意向を持っており、私たちの目的意識とも一致していた。それらがよい結果にむすびついたのだと考えられる。

今後の展望としては、動物実験業界の慣習として情報発信を控えている現状があるが、今後は科学コミュニケーションの技法を用いたよりフラットで正しい発信をすることで、一般市民や動物実験従事者双方の理解が進むものと考えられる。また、理解が進むことで動物実験従事者が抱える心の負担の認知も進み、支援や理解が得られやすい環境が作られることが期待される。



写真2 サイエンスアゴラ 2021 当日の様子